

『ラヴェル：大作曲家の最晩年の作品群』

伊藤美由紀（2400文字）

1937年、脳の手術後10日目、62歳で亡くなったラヴェルの最晩年の10年間の音楽活動に焦点をあてたい。1927年頃から、周期的な不眠症や神経衰弱症の発作の徴候があったらしい。しかし、同年は、ラヴェルにとって最初の北米への長期演奏旅行を行い、作曲家として多大な成果を得た意義のある年でもあった。

1927年は、アメリカ人のリンドバーグが、ニューヨークからパリへの大西洋単独無着陸飛行に約33時間で初めて成功した年でもある。同年にラヴェルは、パリからニューヨークへの船旅から、北米横断の汽車旅の長期演奏旅行を行う。ニューヨーク、シカゴ、ボストン、ロサンゼルス、モントリオール、ニューオリンズ、等、北米の様々な都市を4ヶ月かけて駆け回る。時には、ピアノ伴奏を、またオーケストラの客演指揮者としても登場し、世界的な名声を得る。パリに戻ってからも、スペインへの演奏旅行、オックスフォード大学からの名誉音楽博士号の授与などもあり、国際的な知名度を高めた。

北米旅行に出発する前に、親友イダ・ルビンシュテイン夫人の為にバレエを完成する事を約束していた。彼女から、アルベニスの《イベリア》からの6曲を管弦楽編曲して欲しいとの依頼であった。既にスケッチに取りかかっていた段階であったのだが、スペイン人の指揮者フェルナンデス・アルボスが管弦楽編曲を行っており、著作権を得ているという事実を知る。ラヴェルは、自作の管弦楽編曲を考えようとしたものの、最終的には新作を書く事に決心する。その作品は、スペインのアンダルシア地方の民俗舞踊およびその舞曲を意味する《ファンタンゴ》と最初、名付けたものの、あの有名な《ボレロ》となり、1928年、ルビンシュテインのバレエ団によりニジンスカの振付けで、パリ・オペラ座で初演される。ラヴェル本人の予想に反して、《ボレロ》は大衆的人気を得て、現在に至るまで、彼の作品中、最も有名なものとなっている。作品について本人は、「極力動きを押しえたスローダンスで、リズムばかりか、メロディーやハーモニーまでも徹頭徹尾、同じ型で貫かれている。多様性の唯一の要素は、オーケストラのクレッシェンドによってもたされる。」と語る。「特別に限定された方向での実験的な作品である。」とも言っているように、本人にとっても、この作品は区別されるべきで、まさか再演どころか、有名になることなど全く期

待していなかったのである。最初から最後まで執拗に繰り返され、展開されないスペイン、アラビア的な民謡風のシンプルな2つのテーマは、聴き手への感覚へと訴えかける。ラヴェルは、規則正しくメトロノームのようにテンポを刻み、最後までアツチェレランドを避けながらクレッシェンドを保持することに執着していた為、ニューヨーク・フィルハーモニックをトスカニーニが、早すぎるテンポで、終わりに向けてアツチェレランドで演奏した際には、かなり憤慨したと伝えられている。

1929年には2曲のピアノ協奏曲に着手し、1931年に完成する。最初に完成したのは、第一次世界大戦で右腕を失ったオーストリアのピアニスト、パウル・ヴィトゲンシュタインからの委嘱による《左手のための協奏曲》である。コントラファゴットによる低音域のミステリアスなテーマで始まり、ジャズ風な効果を含んだ単一楽章による作品である。ピアニストの左手のみの作品であるが、そのように思わせないようなピアニストの限界まで挑戦をした名人芸的なテクニックを盛り込んでおり、オーケストラも3管編成で重厚な響きを追求している。一方、ラヴェル自ら演奏する事を考えて書き始めていた古典的な3楽章形式の《ピアノ協奏曲ト長調》は、モーツァルトやサンサーンスの協奏曲と同じ精神で書かれていると本人は言う。1楽章は、ピッコロによるスペイン民謡風の旋律で始まる。ブルー・ノート・スケールを使用し、ジャズの影響も顕著である。アダージョの2楽章では、サティの《ジムノベティ》に通じる古風な叙情性が旋律に漂い、冒頭の美しく長大なピアノ独奏の個性が光る。プレストの3楽章は、金管楽器の明朗とした響きで華やかに盛り上がる。

1932年、映画会社からの注文で《ドン・キホーテ》という映画のための作曲を依頼される。ミヨー、イベール、ファリャにも同じ曲の依頼をしており、最終的にはイベールの曲が用いられたのであるが、ラヴェルは、このテーマを放棄することなく、1933年に歌曲3部作として《ドゥルシネア姫に想いを寄せるドン・キホーテ》を完成させる。2曲目は、ヴィブラフォンを始めて使用した作品でもある。まだまだ様々な作曲構想を抱いていたにも関わらず、不幸にもこの作品が最後となってしまった。

1932年にタクシーに乗っていたときの追突事故で軽い脳震盪をおこして以来、持病が悪化し、1933年には運動失調症や、記憶喪失、失語症などの症状をきたすようになり、作曲活動は不可能となる。「頭のなかはアイデアでいっぱいなのに、それを紙の上書き留めることができない。」と告白する。自分の名前でさ

えサインをすることが不可能になっていた。1935年にイダ・ルビンシュテインの援助によりスペイン、北アフリカをめぐる最後の旅行に出かける。アラブのエキゾチックな風景、色彩、音にインスピレーションをうけて《モルジアーヌ》のスケッチをいくつか残したそう。最後まで全力を尽くし、自分の演奏会に出かけて指導、助言をしたものの、1937年《ダフニスとクロエ》の演奏の後に、「私の音楽は、何て美しいのだろう。頭の中にはまだたくさんの音楽があるのに、今はもう、私は終わってしまった。」と嘆いたのが最後となる。

病状が悪化する前から、デルテイユの《ジャンヌ・ダルク》に基づくオペラ、《シェエラザード》によるオペラ、《千夜一夜物語》からの題材を抜粋したイダ・ルビンシュテインの為のバレエ《モルジアーヌ》などの舞台作品の広大な構想を考えていたものの、着手することは不可能となってしまった。

ラヴェルは、代表作《ボレロ》を含む最晩年の作品まで、調性を放棄せず、過去の音楽様式、スペイン民謡、ジャズなどの要素を取り込み、楽器法を知り尽くしたオーケストレーションの天才として、作品を独自の音色で結晶化した作曲家である。